魔法少女リリカルなのは剣(ブレイド)

ツチノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは剣^{フレイド}

【Nコード】

N2881M

【作者名】

ツチノコ

【あらすじ】

闇の書事件が解決してからしばらく立ったある日のこと。

災害救助隊の任務に出ていたライル・イシュザールはある任務で別の世界に来ていた。そこで見つけた不思議な力を持つ剣を手にしたことで苦難の運命に引きずり込まれていく

第0章 始まりの刻 (前書き)

処女作ヒーハーヴ () ヲ

というわけですチの「でござえやす」 () ヲ

今回初の二次創作なのでやや緊張気味な今日この頃……就職活動が忙しいのにこんなことやっている俺って

でも

でも

でもでもでも

そんなの関係ね「いわせねえよ!!」

とまあ、こんな感じで文才のない男が頑張りますのでよろしくお願
いします

第0章　始まりの刻

第81管理外世界アストヴァール、全体が黒い光に覆われ、毎日が夜であるかのような暗闇の世界。そこに唯一存在する街の郊外にその少年はいた。

月夜に明るく照らされるブラウンの髪、漆黒の瞳の先には黒いナニかが写っていた

黒い柱のような胴体。上の方には目であろう赤い宝玉のようなモノがあり、身体中から黒い触手が生えている

その触手には小さな女の子が捕まっており、こちらに助けを求めている

「助けてー!!!」

悲鳴を上げる女の子に応えるように少年は右耳に付けられているピアスに指をあてると緑色の光を点滅させる

「シェイラ」

「了解しました。準備は出来ています」

「吹き荒れる大風」
- ストーム・ブラスト -

シェイラの剣先から放たれた緑色の収束砲は全く狂うことなく黒いナニかの瞳であるう赤いコアを貫いた。すると、黒いナニかの体が空気の抜けた風船のようにしぼんでいき、女の子を残して地面の中に溶け込むように消えてしまった

「……………はれ？」

怖くて目を瞑っていたのだろうか何が起こっているのか分からない様子であたりを見回しているが、あたりには先ほど自分を掴んでいた黒いモノはなく少年が1人立っているだけだった

「……………司令、ターゲットの消滅確認しました。それと捕まっていた少女を救出しました」

なにもない空間に向かって話しかけている少年。その少年の前に突然小さな映像が現れ、そこには1人の青年の姿が映し出されていた。ライルと同じブラウンの短髪に片目に痛々しい切り傷のある男性だ

『お、ライルか、ご苦労さん。とりあえず救助者を見送ったらこっちに戻ってきてくれ』

「了解しました」

青年に敬礼すると、画面が消え再び暗い世界が広がる。女の子を見ると、にぱ〜と太陽のような笑みを浮かべながらライルが来るのを待っていた。ライルが近付くと、女の子は嬉しそうにライルの胸に飛びつく

「お兄ちゃんありがとう」

「今回は大丈夫だったけど、次からはお父さんやお母さんと一緒にいなきゃダメだからね」

「…………でも、リュカ、お母さんもお父さんもいないもん」

下をうつむき、肩を震わせるリュカ。父と母と母親生き別れになったのだろうか等様々な可能性を考察していると、ノースリーブの服から見える肩にEX - AQUARIUMと不思議な文字が刻まれているのを視界が捉えた

(この子……………まさか……………人造魔導師素体)

人造魔導師とは人間の体に機械を取り込むことによって、強制的に強力な魔導師へと改造された人のことをいい、成人の他にこのような子供も実験の対象となっているようだ

(人造魔導師の実験は厳しく規制されているはずだが………まあ、このような本局から離れていては規制も厳しいか)

「リュカね？変なおじさんたちに変な機械いっぱいつけられたの。そしたらね？頭の中がぐちゃぐちゃになっちゃうの………リュカ怖くて逃げてきたの」

リュカの瞳から零れおちる滴、実験にされていた時のことを思い出してしまったのだろうか、ライルのバリアジャケットの裾をしわができるほど強く握りしめ、なかなか離さない

ライルは困っていた。本来ならこのような子供たちは本局に預けるのだが、生憎ライルは本局なんかに預けたら必ず同じように実験のモルモットにされてしまう。ライルがそのような考えを持ってしまっただけで、本局の連中は腐っていたのだ

しかし、かといって自分が預かるのはかなり厳しい。ライルは救助隊だけではなく、そのほかにも教導隊で訓練生を教えたりしているので、女の子1人に構ってあげる時間がないのだ

「ちょっと待っててね」

ライルは再び何もない空間から画面を出し、どこかに連絡を取る。

やがて画面から姿を現したのは先ほどライルと会話をしていた目に切り傷のある青年だった

『おう？なんかトラブルでも起こったか？』

「司令、実は……………」

ライルはリュカの証言と人造魔導師実験について司令に報告した。

司令はしばらく考えたのち、キリツとした表情でライルに話しかける

「人造魔導師ねえ……………確かに本局のほぼ反対側にあるその世界じゃ危険な実験なんざやりたい放題だからな。とりあえず、お前はその施設の詳しい詳細を調査と報告。あとその女の子はお前が何とかしろ」

9

了解しましたと言いかけたライルだったが、肝心のリュカについての処遇がどうにも納得のいかない内容になっていたので、慌てて抗議の声をあげる

「施設の調査については了解しましたが、女の子の処遇については納得しかねます。先ほども報告したように、自分には教導隊の仕事もあるため、子供1人を養う余裕は……………」

普通の人ならば、この声を聞いて別の方法を考えるのだろうか、こ

の司令はほかの人間の想像を遙かに超えた考えを持っているだった。司令はライルにリュカと変わるよう命令したので、納得のいかない表情でリュカを抱き上げ、司令が映る画面に映る高さまで上げる

『リュカちゃんだったかな？リュカちゃんはそこのお兄ちゃんと一緒にいたいかな？』

「うん！……！！！」

即答だった、というよりもこの司令はライルが子供に弱いことを知っておきながら、あえてリュカに質問したのだ。司令の予想通りリュカはライルと一緒にいることを望んだため、ライルはもし断ったらリュカを泣かせてしまうという罪悪感に襲われることになるのだ

「司令………あなたはやっぱり悪魔だ」

『はっはっは、何とでもいえ。取りあえずリュカちゃんはお前が帰ってくるまでこっちで預かるから、お前はのびのびと調査にあたってくれたまえ！！はっはっはっはっは！！！！！！！！！！』

悪魔のささやきに近い笑い声をあげながら通信を切る司令。ライルは愕然としながらも取りあえずリュカと向き合う。リュカはやはり太陽のような輝かしい笑みを浮かべている

「リュカ、君は本当に俺と一緒にいたいのか？」

「うん！！！！リュカ、お兄ちゃんと一緒にいたい！！！！」

「そうか……………じゃあ、俺が帰ってくるまで静かにいれたら、考えてあげる。約束できる？」

リュカに小指を出し、彼女の足元に緑色の魔法陣を展開させる。最初は何かわからない様子のリュカはやがて、にっこりと笑みを浮かべ、その小指に自分の小指を絡ませる

「ゆ〜びき〜りげ〜んまん、う〜そついたらは〜りせ〜んぼんの〜ます、ゆ〜びきつた！！！！」

指きりし終えたと同時に転移魔法でリュカを司令のもとへ転送する。そして、ライル1人になると、この世界に唯一存在する街へと移動を始める

「まずは情報が足りない、ここから街まではどのくらいかかる？」
「だいたい徒歩で2時間になります」

「2時間か……………飛んで行くぞ」
「了解しました。フライ・ウィング」

ライルの背中から緑色の翼が現れ、一気に上空に飛翔し、街があるであろう方向に向かって飛んでいく。暗闇の夜空を走る流れ星のよ

うだった

「主任！やはりどこを探しても見当たりません！！！」

「馬鹿者！！見当たりませんで済むことか！！今、この国には
時空管理局の救助隊が来ているんだぞ！！もし、そいつに見つ
つたら、どうなるか分かっているのか！！！」

研究員の頬を殴り、息を荒くさせる。ここはアストヴァール唯一の
街アストリアの中央にある研究施設。表向きは他世界の生物の研究
をしているが、裏ではそれらから得た知識を使って人造魔導師の研
究をしていた

しかし、完成間近だった素体のリュカが逃げ出してしまったため、
研究を中断せざるを得なくなっていた。おまけに救助隊のライルが
この世界にいることは情報として入っていたので、なおさら必死に
なって探さないといけないのだ

「いいか！！必ず救助隊の奴よりも先に見つけるんだ！！！」

「は、はい！！！」

殴られた男は頬を擦りながら近くにいたほかの研究員を連れて再びリュカを探すべく街へと飛び出していった

「くそ！！！せっかく………せっかく完成間近だったのに………あとはこいつがうまく起動できれば完成だったのに………」

悔しい表情を浮かべる男の手の中には青い光を放つ指輪があった。そして、それを大事そうに小さなケースにしまうと、奥の部屋の扉をあける

そこには緑色の液体に浮かぶ不気味な生き物や、人間と何かが混ざったような生き物のようなものが光の灯されていない目を彼に向けている。彼はそれらには目もくれずにさらに奥へと進む。そこには完全に人の形をしたものがカプセルの中に浮かんでいた

「気分はどうだい？リオス」

リオスと呼ばれた金髪の青年はカプセルの中で力つと目を見開き、男を睨みつける。その瞳にはやや悲しみや憎悪のようなものが含まれているように見える

『いいわけがないだろう。このようなものいつまでも入れられていては』

「くっくくく、そう言わないでくれたまえ。君たちは数少ない成功

者でありロストロギア - 魔の剣 - の適合者となったのだから」

先ほどの青い指輪を近くの机の上に置くと、そこには様々な宝石の
ような石がアクセサリーとなっておかれていた

『適合者か……俺たちは好きでそうなたわけではないのだがな』

「本当ならば完成した君たちは外に出してもよいのだが、生憎リュ
カが逃げ出してしまつてね、もう少しだけ待つてもらつよ？」

男はリオスに背を向け自分もリュカを探すために部屋を離れた

『エリアーダ、ティルア起きていますか？』

リオスが目を瞑っている2人の女の子に声をかける。寝ているのだらうと思っていた2人はリオスの声にバチツと目を開いた。そして、辺りをきよるきよる見回すと深いため息をついた

『はあ、やっといったかあの陰キヤラ野郎は』

『リオス、いつになったら計画をはじめますの？』

『もうしばらく待っていてくれ、データによると、今、时空管理局と呼ばれる組織のやつがこの世界に来ていと聞く。リュカがこの施設を逃げ出したおかげで奴らは動揺を隠せないでいる。そして、おそらくその人間はこの施設に来るはずだ。それを狙ってここを出る』

彼らの脳は様々な改造を施されているため、その人間が考えていることを読み取れるようになっていた。ゆえに、ライルが来たという情報やリュカが脱走したという情報が自然と脳に入ってきているのだ

『じゃあ、俺はそれまで寝て待つとするかねえ』

茶色のショートヘアの中に金色の髪が見えるティルアと呼ばれた女の子は大きな欠伸をかき、再び眠りについてしまった

『では、ワタクシも特にやることもないのでしばらく休憩させていただきますわ』

漆黒の腰まで伸びたロングヘアのエアージェュと呼ばれた女の子も目を閉じて来るときまで休憩をとることにした

『……………リュカ』

リオスだけは脱走したリュカのことを心配していた。意外と妹思いな一面を発見した

「ここがアストリアか」

シェイラを待機形態に戻し、街へと入ろうとするライル。しかし、それは街の入り口の門の両脇に立つ門番によって遮られてしまった

「何者だ！！！許可なくこの街に入るとは許されないぞ！！！！」

「救助隊に所属しているライル・イッシュザールと申します。少々お聞きしたいのですが」

「っ！！失礼しました！！」

自分の名刺（手作り）を門番に見せると、顔を青ざめ、ライルに向かって敬礼をする

「この街に研究施設はありますか？」

「研究施設はこの世界にはあの中央に位置する研究施設しかありませんが……………それがどうかしたんですか？」

「いえ、ただあの研究所ではどんな実験をしているのかが気になったもので……………あの中には入れますか？」

ライルが門番に尋ねると、門番は懐から1枚の名刺のようなものをライルに渡す。それは通行許可証らしきIDカードで、門番の男の名前や写真が載っていた

「よろしいんですか？」

「はい。それがあればあの施設に入ることができます。一般市民は決して入ることができなく、それがあってもほんの少ししか見れない可能性があります」

「いえ、十分です。ありがとうございます」

門番の2人は両脇によけ、ライルが通れるように道をあける。ライルがそこを通り過ぎすと、右側にいた男はIDカードを渡した男に話しかける

「おい、よかつたのかよ。あれがないともうあそこには入れねえぞ？」

「いいんだよ。どうせあの陰キャラ野郎の研究がばれたんだろう。あの研究がばればあの鬱陶しい奴らが街からいなくなるからな。そう考えれば安いもんだ」

どうやら研究所にいるものたちは街の人からあまりいい印象を受けていないようだ。それもそのはずだ。人造魔道師の実験にはこの街の人々で行われていることが殆どなのだ。次は自分だ次は私だと人々は恐怖で仕事に出かけることもできないでいるのだ

「成る程な。ま、俺もあいつ等は前々から気に入らなかつたからな。街の人もこれでまた仕事に精を出すことができるだろう」

「さて、そんじゃあ、街の人たちにこの事を知らせにいくとしますかね」

「そうだな」

門番の2人は近くを歩いていた警備隊の2人に門番を変わってもら

い、未だ恐怖で外に出ることのできない人々に嬉しい知らせをする
ために街の広場へと向かった

第1章 反逆の刻 (前書き)

文才がなさ過ぎる……

最近エクシリアとウイイレに没頭中です

第1章 反逆の刻

街の中は閑散としているというよりも、本当に人が住んでいるのだろうかと考えてしまうほど静まり返っていた。ライルが事前に司令から聞いていた情報では暗闇の中でも広場では市場が開かれており、活気に溢れているというものだった

「……………おかしいな。司令の情報とは大分違うなあ」

・無理もないでしょう。この街で人造魔道師の実験が行われているのですから・

「確かにな。おそらくこの街の人も被験体になっているだろうからな」

・なんとそれでも止めないといけないですね・

「そうだね。それにしてもこれだけ人がいないんじゃない情報集めようがないな」

・そうですね。どうしましょうか？・

「そうだな、移動しようか……………ん？」

このあたりでは情報収集は無理だろうと次の場所に移動しようとしたライルの視界に必死になって何かを探している白衣をきた男が入った

「くそっ、どこに行ったんだアイツは」

ライルの存在に気づかず、声に出してしまつほど探すのに必死になつている様子の男。当然、怪しいと思つたライルは自分に背を向けて愚痴をこぼしている男に近づく

「あの、すみません」

「ん？なんだね君は」

「私は時空管理局救助隊所属のライル・イシュザールです。少々お聞きしたいことがあるのですが」

時空管理局という言葉聞いた瞬間、男は顔を真っ青にし、ライルに背を向け、猛ダッシュで逃げていく。あれでは自分が怪しい人間だということを証明しているようなものだ

「シエイラ、バインド。念のため2重にして」
「承知しました」

ライルの足元に緑色の三角形の魔法陣が展開されると、逃げていた男の体中に緑色の縄のようなものが巻きつき、動きを止めてしまった。ライルは捕縛に成功したのを確認し、男に近づいていく。男はバインドで身動きが取れないのに何とか逃げようと体をクネクネねじっている

「くっ！！外れない！！」

「無駄ですよ。念のためにバインドを2重にしておきましたから・・・さて、改めて自己紹介を。時空管理局特殊防衛局防災士長兼教導隊ライル・イシュザール一等空佐です。何故逃げ出したか、そして何を探していたか、詳しくお話ししてもらいます」

言葉だけではこの男は絶対に喋らないと思ったライルはシェイラを男の首に突きつける。ひんやりと冷たいデバイスの感触が男に恐怖を与える

「き、貴様！！それでも時空管理局か！？こんなことをしていいと思っっているのか！？」

「ほお、まさか貴方にそんなことを言われるとは思いませんでした・・・ですが」

首に突きつけているシェイラの刀身をより男に近づける。魔力で創られた刀身はいとも簡単に男の首の皮を1枚切り裂く。切られたことから赤い血液が滴る

「ひいー！！」

「生憎、私は他の管理局の執務官とは違い『手加減』というものは一切ありませんので、あなたが喋らなければ私のデバイスが貴方の

首を一閃しますよ?」

ライルの目を見て本気だと感じた男は顔を真っ青にして体をガタガタ震わせる

「理解していただけたようで。所であの研究所について色々教えてほしいのですが」

男は懐からIDのついたカードを差し出す。どうやら研究所に入るのに必要な物のようだ。ライルはそれを受け取ると男のバインドを解除せずに研究所に向かって歩き出す。男は後から来たほかの救助隊のメンバーに捕獲されたそうだ

研究所を外から見てみると、外装は非常に綺麗な白、入り口付近には色々な動物の形をした肖像が来た人を中に誘導するかのように道の両端に並んでいた。どうやらそちら側は見学者のための入り口のように、その反対側には関係者しか入れない入り口があった

「まあ、一般の人もあるんだから見た目はちゃんとした研究所になっているみたいだね」

中はどうなっているんでしょうかね? -

関係者用の入り口に設置された認証システムにカードキーを差し込むと、赤いランプが青に変わり、ガチャッと施錠が解除された音がし、扉が開き中に入ることができた

中に入ると、色々な世界の生物の剥製が並んでおり、一見、動物の研究をしている研究所のように見える。しかしシェイラにカードキーのデータを読み込ませ、研究所内のマップを開くと、一点だけ赤い光を灯している箇所をみつけた

「なるほど、不可視の魔法、それも普通の魔導師には発見できないような高度のものだ。研究所の中はどこにいても同じような光景。迷わないように印をつけていたわけだな」

相当な手練れがいるようですね

シェイラの言うとおり、これほど高度な不可視の魔法はオーバーSかニアSランクの魔導師が使うようなものだ。研究者の中に高ランクの魔導師がいることを知り、ライルは警戒を強める

「シェイラ、この魔法の解除にはどれくらいかかりそう？」

そうですね。そんなにはかからないとは思いますが、解除している間にほかの研究者たちが戻ってきてしまう可能性もありますから

.....

ライルだけが侵入するのならば解除する必要はないのだが、ほかの

救助隊の応援が来た時に場所が分かるようにしなければならぬ。
そのためには解除するのが1番良いのだが、その間に研究者たちが戻ってきて見つかってしまうという面倒事もできれば避けたいところだ

ライルはしばらく考えてのち、シェイラを起動させ、不可視の魔法が掛けている壁に向かって振りぬいた。すると、壁の前にあった透明な壁がガラスが砕けるように破壊され、そこから地下へと続く階段が現れた。しかし、それと同時に研究所内に警報が鳴り響く

「やっぱりか・・・早く行こう」

「了解しました」

警報を聞いた研究者たちが逃げ出すのを防ぐために急いで地下に続く階段を下りていく、そしてライルの姿が消えた研究所内には警報ベルが鳴り響き続いた

「む？侵入者か!？」

警報の音に気がついた研究長が研究していた手を止め、そこら中に設置した監視カメラの映像を映し出す。その中の1つに地下へ続く階段を下りるライルの姿が映っていた

「くそ！！あの小娘が戻ってくれば研究が完成するのに！！おい！！
！その君！！」

研究長と一緒に研究をしていた青年に声をかける。漆黒の髪に緋色の瞳を持った男性が歩いてくる。男性が画面を見ると、ライルがこちらに向かってだんだん近づいてきているのが分かる

「侵入者ですね」

「そうだ、君の力で追い払ってくれないか？」

「分かりました」

どうやらこの青年は研究長の助手でもあり、侵入してきた者に対抗する力を持っているようだ。おそらく先程の不可視の魔法をかけたのもこの青年だろう。青年は研究長の問いに答えるとデバイスらしき純白の宝石が付いたピアスに手をかける。研究長は一瞬あのようなデバイスを与えた覚えはなかったが、おそらく他の研究員が与えたのだろうと考え、再びライルの様子を見る

「分かりました。では

さよつなら」

グシャツという音とともに研究長の左胸から純白の剣が突き出し、純白の刀身についた真っ赤な血が不気味な光を放つ。研究長は何が起こっているのか分からないまま、床に倒れてしまう

「な……………き……………貴様……………何故!?……………しかも……………それは……………」

「ええ、そうですよ。研究長に内緒で研究させてもらった魔剣の1つ……………光の魔剣アルビオンです。それにしても研究長は全く気がつかなかったんですね」

青年の全身が光り輝き、だんだん変化していく。光が薄くなると、そこには純白の甲冑に金色のラインの入ったバリアジャケットに血液の付いた白銀の大剣を研究長から引き抜く。引き抜かれた研究長の傷口から大量の血液が床を真っ赤に染める

出血多量で言うことを聞かない体に鞭を打ち、青年の顔を下からのぞきこむ。青年の顔を見た瞬間、研究長の顔が驚きに染められる。

そんな研究長の表情を見た青年は不気味な笑みを浮かべ、大剣を振り上げる

「お、お前は！！何故おまえが！！何故おまえが生きて「驚きましたか？その質問の答えは地獄に行つて1人で考えてください」ひい！！」

力いっぱい振り下ろされた大剣はいとも簡単に研究長の胴体に大きな風穴を開けてしまった。研究長が床に倒れ、動かなくなつたのを確認すると、青年は研究室の奥に進み、カプセルに閉じ込められているリオスたちを機械のスイッチを押してカプセルをあげ、解放させる。いち早く目をあけたリオスは漆黒の甲冑に金色のラインが入つた騎士甲冑身につけ、金色の光を放つ指輪を装着する

「目覚めよ……雷の魔剣イクスエリア」

・OK ボス。スタートアップ・

イクスエリアと呼ばれた指輪が応え、1本の金色の刀身を持つロングソードに変化する。神々しい光が室内を明るく照らす。その光でエリアージュ達が目を覚ましたようで不機嫌そうにカプセルから出てくる

「まったくよお、人が折角気持ちよく寝てたのに……………」

「リオス、一体何事ですか？」

「……………時が来たんだ。脱出するぞ」

ティルアとエリアージュはリオスの言葉に首を縦に振るとそれぞれ
黄金色と水色の宝石のついたアクセサリーを手に取る

「起きやがれ大地の魔剣ゲルニア」

「目を覚ましてくださいまし氷の魔剣セルフエリア」

- O K m u s t e r s t a n b y r e a d y -
- A l l r i g h t p r i n c e s s g e t s e t -

2色の光が2人を包み込み室内を一層明るく照らす。やがて、光が
はじけると2人はそれぞれ黒の甲冑にそれぞれ水色と琥珀色のライ
ンの入ったバリアジャケットに身を包み、ティルアは2本の等身大
の大剣を構え、エリアージュは氷で造られた細剣を片手に持ち、そ
れぞれ自分の剣を構えた

「へえ、こりゃあ……………」

「立派なものですわね」

それぞれの剣をまじまじと見つめていると青年がアルビオンを起動させ、真上を見上げる

「さて、長居は無用だ。この施設ともお別れしよう」

アルビオンの刀身が純白の光を放ち、やがて刀身の周りを囲むように魔法陣の輪が現れる

「裁きの光を」

- J U D G M E N T B U S T E R -

アルビオンの低い男性の声が響いた後、天井に向けて巨大な白い収束砲が放たれた。まるで天に向かって立ち上る白い柱のようだった

その白い柱を青年達は昇天するようにその柱を昇っていく。残された研究室だった場所には2色の光を輝かせる宝石が寂しく残っていた

第1章「反逆の刻」（後書き）

こんな感じで敵出現フラグが立ちました。

第2章 目覚めの刻

「ここから強力な魔力反応を感じただけど……………」

ライルが先程まで青年達がいた場所に着いたのは白い光が消えて、研究所が大きく揺れてしばらくしてからであった。そこに着いてみると、天井に空いた人為的に作られたであろう巨大な穴。何かを入れていたであろうカプセルはすべて開いており、下は緑色の液体で水浸しになっている。そのそばには緑色の液体を赤く染める研究員らしき人物が倒れていた

先程確認をとった所、息はあるものの、もはや虫の息となっていた

「ひどい有様だな」

「そうですね。しかし、地下にこのような施設があるとは思いませんでした」

ライルがこの場所に来るまでに人造魔導士の実験体となったモノがカプセルに浮かんでいた。何故モノなのかというと、もはや原型をほぼ留めておらず、人か動物かも分からないほどひどい有様だったからだ

「そうだな。恐らくこいつは自分が造りだした人造魔導士にやられたのだらう……………自分の欲望のために犠牲にした人の恨みが生ん

だ……………悲しい結末だ」

何か手掛かりになるような物は無いのだろうかと部屋の中の魔力を探っていると、机の上に尋常ではない魔力反応を感知したそこに向かうと、そこには2色の輝きを放つ宝石が2つ並べるように置かれていた

「これは……………っ!？」

宝石に触れようとした瞬間、ライルの脳裏に激痛が走り、その場にひざを突き、頭を抱えて苦しみ出す

…どうしたのですか!？ -

シェイラの必死の呼びかけにも答えることの出来ない程の激痛に耐えるライル。そんな彼の脳に何か声のようなものが聞こえてくる

(……………けて……………たす……………助けて)

「ぐあああああ!!(何だこの声は!？助けを求めている……………)

「(助けて、助けて助けて助けて助けて助けて助けて)

助けて)

泣き叫ぶ女性のような声で必死に助けを求めている。それはシェイラには聞こえておらず、ライルにだけ聞こえているようだ

「くっ……………待ってる……………今、解放してやる」

ライルはいきなり緑色の宝石の付いた指輪を手に取り、己の右手に装着した

- 剣の適合者確認完了。コネクトスタート 接続開始 -

機械的な声が聞こえた後、ライルの周りを竜巻のような強い風が包み込み、彼の様子が全く見えなくなってしまった

(……………「うは」)

気絶していたようで、ライルの瞳が開かれると、そこはどつやら地下牢のようで、彼の手には鍵のようなものが握られていた

(助けて……………助けて……………)

先程聞こえてきた声が再びライルの脳裏に響き、先程まではいかに軽い頭痛が彼を襲う

(こっちか……………)

地下牢の奥へと歩を進めるライル。他の牢屋には既に屍となった者や白骨化した者までおり、全員が息耐えていた

(何なんだここは……………それにさっきから呼び掛けているのにシエイラから返事がない)

ライルが先程まで身に付けていたはずのシエイラの姿が何処にもなく、必死に呼び掛けるが、彼女が反応することはなかった。仕方なくそのまま歩を進めるライルの前に一際巨大な牢屋が立ちはだか

った

(助けて……………助けて……………助けて)

「どうやらこの頭痛の原因はここからのようだな」

中の様子確かめようと覗き込む。そこには壁に幾つもの赤い血痕のようなものが付着しており、隅のほうに異臭を漂わせる何かがある山転がっている。そして、中央には鎖で全身を縛られ身動きが出来ない状態で吊るされている人がいた。体型からしておそらく女性ではないかと予想させる

「君か、さっきから俺の脳に救助を求めているのは」

「……………た……………す……………け……………て」

今にも息絶えてしまいそうな女性をみたライルはため息をついた後、手に魔力をともし、牢屋に拳をぶつける。すると、いとも簡単に鉄でできている牢屋の柱が吹き飛んでしまった

女性はそのことに驚く気力すら残せていないのかぐったりとしている。彼女を抱き上げ呼吸の確認をとると僅かだが呼吸をしているのが分かった。しかし、急がなければ彼女の命はなくなってしまうだろう

何とかしたいが肝心のシェイラは何の反応も見せず、ここがどこなのかも分からない

..... 契約適応者発見。これより契約に入る -

機械的な声がどこかから聞こえてきた後、ライルの全身を強風が包み込む。いきなりということで反応できなかったライルは脱出が出来なくなってしまう

- ロストロギア、ゲイル・ファルコン、風帝の鎧装着 -

女性のような声がした後、ライルの体を漆黒の風が包み込み、両手には縦長の竜巻が巻き付いている

「なんだこれは？」

巻き付いている竜巻が弾けると、漆黒の鎧に緑色のラインが引かれ、胸元には大きな緑色の宝玉のようなものが埋め込まれ、左右の手には緑色の刀身を持った双剣が握られていた

- ロストロギア、ゲイル・ファルコン、風帝の鎧、正常に起動を確認しました -

「ロストロギアだと？」

デバイスがロストロギアという今までにない事例に戸惑いを隠せないライル

すると、今までグツタリとしていた女性の瞳がバチンと開かれる

そこから覗く翡翠の瞳がライルの姿を映し出す

「目を覚ましたか？早速だが詳しい話を聞かせてもらおう」

「……………やっと見つけました……………我が主」

意味深な言葉を残して女性は再び気を失ってしまったようで、ライルの腕の中でグッスリと眠っているかのように動かない

「おい、意識を持つんだ。もうすぐ助けてやる」

瞬間、ライルの周りの風景に突如亀裂が走る。やがてそれは全体に広がりバラバラとガラスのように砕け散る

そして、そこから現れた真っ白い光にライルと女性の体が吸い込まれていく

「くっ、一体何が起こっているんだ!?!?!?」

- ライル、どうしたのですか!?! ライル!?! -

竜巻が晴れると、急に動かなくなってしまったライルに必死にシエ
イラが呼び掛けるがまるで死んでいるかのようにピクリとも動かない

- 先程の竜巻といい、何が起こっているんでしょうか?.....

...!?!? 生体反応!?!? -

先程は何も感知しなかった生体反応が急に感知された。それは先程
虫の息だった研究長からのものだった

「くっ、ここの秘密を知ってしまったからには生かしてはおかんど
!?!」

研究長は懐から小型のナイフの形状のデバイスを取りだし、全く動
かないライルに照準を定める。その際にライルの手に握られている
エメラルドの宝石に目がいく

「き、貴様!!それを返せ!!貴様のような小物が扱っていいものではない!!」

-返せといわれましてもライルが動かないのですから不可能です-

「なに!?まさかエンゲージが始まってしまったのか!？」

-エンゲージですか?よく分かりませんがなんなのですか?-

「貴様が知る必要はない。ここで死ぬんだからな!!」

研究長が両手でナイフを握りスピードを上げてライルに迫る。しかし、ライルは一向に動く気配がない。シェイラも何とか薄いシールドを張るものの、これで攻撃を防げる可能性は余り高くない

-困りましたね。ライルが起きないと……私だけでは防ぎきれない可能性があります……あら?この魔力反応は-

「死ねええええええええええええええええええ!!!!!!!!」

研究長のナイフがライルの心臓に突き刺そうとした瞬間

スパン!!

「え……………?」

金属で造られているデバイスが軟らかくなってしまったかのように切られてしまった。それも鋭利な刃物で切られたような綺麗な切り口になっている

- おはようございますライル。目覚めはどうですか？あと、その不思議な騎士甲冑と双剣はなんですか？ -

「目覚めはあまりよくないな。あと、こいつについては面倒だから帰りながら説明する。シェイラ、こいつを縛っとけ」

- 了解しました -

シェイラが点滅すると、緑色の鎖が研究長の体に巻き付き動くことができなくなってしまった

「貴様！！私にこんなことをしてただで済むと思うなよ！！よくもゲイル・ファルコンを奪いおつて！！」

「分かった分かった。こいつの説明は本局の執務官にじっくり聞いてもらえ」

研究長の足元に魔方陣が現れ、どこかへと飛ばされてしまった

ライルはそれを見届けた後、ゲイル・ファルコンに魔力をこめる

「エクストリーム……………」
- B u s t e r -

床を突き破って現れた巨大な竜巻が全てのものを飲み込みながら天に上ろうと上昇する。そして、天井を突き破ると暗闇の空が姿を現す

「……………凄まじい威力だな」
- とても驚きました -

上空に飛び上がり、空から研究所を眺めるライル。あの研究所で人造魔導師が造られていたとは到底思えないことだ。そんなことを考えていると、研究所の突き破った所から青い光がライルのもとへ迫る。それに手を伸ばすと、青い宝石がついた首輪が現れた。おそらくゲイル・ファルコン同様、人造魔導師のためのものだろう

ふと、ライルは自分の上司のもとへ送ったリュカのことを頭に浮かんだ。彼女もこの研究所から逃げ出したとなると、彼女も人造魔導師である可能性がある

もしかしたら、これは自分がリュカの居場所を知っているから近づいてきたのだろうか。ライルは自分に疑問を投げかけ、自分でそれを否定する。デバイスが自分の意思を持つことなどほとんどありえ

ないからだ。かといって完全に否定できるものでもないのだ

取りあえずその首輪を手にしたライルはリュカが待つ所へと向かった

第3章 拒絶の刻

ミッドチルダ災害救助隊本局

「……………連絡とれず……………か」

ライルに通信を試みる司令だが、何回連絡を取ろうとしても一向に返事をしないライル。その隣では司令の横で上着の裾を握っている。その瞳は少し潤んでいる

「……………」

先程、ライルがなかなか帰ってこないため、寂しくなったのか泣きそうになっているリュカを見た司令がライルに連絡を試みたが、一向に返事がないライルを心配するよりも、ここで泣きだしてしまうかもしれないリュカを心配している

PPPPPPPPPPPP!!

すると待ちに待った連絡が来て、司令とリュカが通信に応じると、茶色のショートヘアの女性八神はやてが画面から姿を現した

「……………なんだチビ狸か。何のようだ？」

『そんなはつきり狸って言うのあなただけですわ。ん？その子……
…まさかおたくの……………ううう、少し前まで生涯独身宣言をしたあなたもとうとう……………』
「勘違いするんじゃないやねえよくそチビ狸」
くそチビ狸！？くそまでつけよったな！！』

「そんな下らねえ事ばかり考えてるから脳みそに脂肪がいつて胸がでかくならねえんだよ」

ピキッ！！

はやての額に青筋がピキッと浮かび上がると、いきなりシユベルトクロイツと夜天の書を起動させる。その様子にこれやばいと冷や汗を浮かべる司令

「おい、八神、なんとなく予想できるが、何をする気だ？」

『いえ、ちょっとムカついたんでディアボろうかと思いましたが……
…あ、ちなみにディアボるっちゅうんは「ムカついたあいつにLet'sディアボリックエミッション」っちゅう意味ですわ』

「やめる！！お前局を破壊するつもりか！？」

『いえ、ただ胸の話は私にとってタブーですので、その時には遠慮なくディアボつていいと三提督から許可をいただきまして……………』

「誰に許可をもらってんだよ！！しかもよく許可してくれたな!？」

『ちゅうわけで、遠慮なく「そ、それよりも八神!!何のようで連絡してきたんだ?」無理やり話を逸らしましたね?まあいいですわ後からいつでもディアボれるんで』

さらつと恐ろしいことを言ったはやて。このあと司令が毎日びくびくしながら帰るようになったのはまた後の話だ

『今日連絡したのはちょっとお願いがありました』

「へえ、お前が俺になあ……………で?何のようだ?」

『ええ、おたくの所にいるライル君を貸していただきたく、「何故それを知っている?」……………やっぱりそこにいたんですね?』

「っ!!てめえ、カマかけやがったな」

『いえ、ナカジマ三佐からそんな噂を聞いてたもんですから……………』

で、ライル君は』

「残念だがお前に会わせるわけにはいかないんだよ。当然、高町とハラオウンの小娘にもな。つつわけでその願いは拒否させてもらう」

『確かに私達にライル君に会う資格はないことくらい分かってます。でも、ライル君の力がどうしても必要なんです！』

「だったら他の奴をあたるんだな。本局のクロノの小僧に聞けばライルぐらいの実力の奴ぐらいいるだろうが。とにかく俺は断固拒否を」司令ただいま戻りました」

運がいいのか悪いのか通信を切るうとしていた司令のもとにライルが帰ってきてしまったそれに気付いたリュカは嬉しそうにライルの腰に抱きつく

「お帰り！！ライルおにいちゃん！！」

「ただいま。いい子にしていた？すみません司令誰かと会話中でした……………か」

『あ……………ライル君……………』

画面に映るはやてをみた瞬間、ライルの表情が強張った。目は鋭くつりあがり、明らかに敵意を向けている

「……………司令、代わってください」

「あ、ああ」

司令の代わりにはやてと向き合うライル。はやてはばつが悪そうに視線を背ける

「誰から聞いた？俺がここにいることを」

『あ……………うん、ナカジマ三佐から』

「……………しまったなあ、ナカジマ三佐に言っておくのを忘れてた」

『……………あのね、ライル君、お願いがあるんよ』

「……………悪いけど、俺はまだあの事件を……………はやて達を許すことはできないんだ」

はやて達とライルの間になにかあったのか。それは本人達しか知らない

『……………分かってる。うちにライル君と会う資格がないのは分かってる。だけど、今回はライル君の力が必要なんよ！！』

「なるほど、ようは俺の力だけあればいいわけだな『違っ！』それだったらクロノに優秀な魔道士を頼んでおくよ。それなら文句はないだろ『ライル君！』』じゃあな……………できればもう連絡しないでくれ」

それを言い残してライルは無理やり通信を切ってしまった

「……………ライルお兄ちゃん」

「ライル……………すまなかった。俺がナカジマ三佐に伝えるのを忘れてた」

「……………大丈夫ですよ……………それよりも司令、見てもらいたいものがあるんですよ」

司令に自分が持ってきた緑と青い宝石を司令に手渡しする

「これは？」

「実は……………」

「……………」

手の傍に置いたシェイラを勝手に持ったリュカはライルに気付かれないように出て行ってしまった

「はあ……………」

「はやてちゃん」

「どうだった？はやて」

ため息をついたはやてに茶色のサイドポニーの女性、高町なのはと金色のロングヘアの女性、フェイト・テストロツサ・ハラオウンが心配そうに話しかける

「……………ダメやった。やっぱりクロノ君に頼んでみるしかないわ」

「でも、ライルくらいの航空魔道士を見つけるのは難しいって言うてたよ」

「それに、私は……………ライル君がいい。ううん、ライル君じゃなきやだめなの。フェイトちゃんもはやてちゃんもそうでしょ？」

ソファーに全体重をかけ、後ろに倒れるはやて。フェイトはなののは言葉に賛同するように枕をぎゅっと抱きしめる

「そろそろや……………せやけどなのはちゃん。ライル君は確実にう

ちらを恨んでいる。それなのにうちの新しい部隊に入ってなんて虫のいい話はないやろ？」

「諦めるしか……ないのかな？」

じわりと瞳に涙を浮かべるのは。すると、はやての部屋のドアを誰かがノックした。誰かと思いいドアを開けたはやての前、正確には下のほうに現れたのは緑色の光を点滅させるシェイラを手につりユカがいた

「ん？あんたは確か司令のところにいる……」

「リュカだよ！！お姉ちゃん達に聞きたいことがあってこの子に教えてもらいながらここに来たの」

- I haven't seen you for a long time. Ms. Yagami and Ms. Takamata and Ms. Haroun (お久しぶりです。八神様、高町様、ハラオウン様) -

「シェイラ……久しぶりやね」

- Yes, it is after that event.)
ええ、あの事件以来ですね) -

「……………ライルは元気にしてる？」

- Yes, it works energetically after that matter. (ええ、あの件からは元気に働いています) -

あの件という単語が飛び交う中、その内容を知らないリュカは頬を膨らませ、椅子に座るはやてのスカートの手を引っ張る

「あの件でなく？リュカにも教えて！！」

「あんな、リュカちゃんやっけ？これは関係ない子供には「関係なくないもん！！リュカ、ライルお兄ちゃんの子だもん！！」」

ピキッ

空間にひびがはいったような音が鳴る。その音の方を見ると

「へえ、ライル君に子供なんていたんだあ」

ダイクスマイル
笑顔を浮かべている高町なのは氏が飲もうとしていた湯飲み茶碗に指圧でヒビが入っていた

「……………ライルには子供がいる……………いない……………いる」

そのお隣さんではフェイト氏が花占いをしているかのように枕から綿を引き抜いている

はやて氏は瞳から光が消え、猛スピードでパソコンになにかを打ち込んでいる。そこには画面いっぱいの殺という文字がびっちりと打ち込まれていた

そして、それをあるアドレスにメールとして送信する

「お姉ちゃん達どうしたの？」

リュカの言葉に我に帰ったはやては2人の仲間を引き連れ、部屋の隅に座り込み、なにやら作戦会議を開いているようだ

「？」

- It . . . ryuka . . . never worries . . . That matter is told from me . . . it . . . (リュカ様、気にすることはありません。それよりも私の方からあの件についてお話ししましょう) -

「わあ〜い！！ありがとう！！えっと……………えくすかりばあ衛玖珠香厘葉亞？」

- It is Sheila . . . (シェイラです!!) -

リュカに鋭いツツコミを入れたシェイラ。やがて、息を落ち着かせるとリュカに話し始めた

ライルが彼女達からいなくなってしまった

悲しい事件の内容を

あれは闇の書事件という出来事が終わってからしばらく経ったある

雨の降る日のだった

当時、ライル、はやて、フェイト、なのはは各々の部屋で各自の作業をしていた

「うーん、やっぱりなのはちゃん達は必要やから………せやけどこの面子にするならかなりリミッターかけなあかなあ」

当時、新部隊設立について色々な人をお願いしていたはやてはその部隊に誘う人員を捜していた

その部屋のドアを悪魔がノックした

「八神様、本局から書類が届いております。私がリンディ・ハラオウン氏に届けますのでサインをお願いします」

「っ！！はいつ！！」

はやては本当に嬉しそうに新部隊設立に関する書類に目を通し、上の記入欄に名前を書きました

何故はやては疑いを持たなかったのか、それはなのはとフェイトの

名前がそこにあつたのと、平和になつたため、疑いが薄れてしまつたのだらう

それに記入してもらつた局員の男は頭を下げ八神様の部屋を後にした。歩いている途中、どこかに連絡を取りながら不気味な笑みを浮かべていた

そして、数日後、事件が起きてしまつたのだ。その日、ライルはシエラのメンテナンスを受けるためにマリエルのところに向かう途中だった

- There is a meeting with Lindel; since the afternoon Lailan d today. (ライル、今日は午後からリンディ様との会合がありますよ) -

「そうか、リンディさんとの話し合い今日だったけ？すっかり忘れてたよ」

- It should be steady any longer. (もう、しっかりしないといけませんよ) -

すると、ライルの前に数人の武装した局員が現れ、四方を囲んでしまった。明らかに異様な雰囲気をかもし出した男達は構えているデバイスをおろそうとはしなかった

「何事ですか？」

「ライル・イシュザール一等空佐殿、八神はやて陸上二佐、高町なのは一等空尉、フェイト・Ｔ・ハラウン執務官からあなたに謀反の疑いがあるという報告を受けました。大人しく投降をお願いいたします」

「え！？む、謀反！？そんな！！何かの間違いです！！」

「そういわれましても御三方からこのような書類が送られてきたものですから」

局員が持っていた書類には確かにライルに対する逮捕状の内容が記されていた

「こんなの知りません！！」

「知らないと言われましても………とりあえず、投降を拒否するならば、武力行使させていただきます」

支給品のデバイスから様々な色の魔力光が収束する。それをみたらイルは騒ぎを大きくしたくないため、大人しく局員についていくことにした

それからしばらくして、執務官室で作業をしていたフェイトのもとにリンディから通信が入った。画面に映ったリンディはかなり焦った様子だった

「どうしたの？母さん」

『どうしたのじゃないわよ！…これはどういうことよ！…？』

リンディから送られてきた書類を見たフェイトの瞳が大きく見開かれ、まるで信じられないものをみているように、硬直してしまったようだ

「なに………これ………私、こんなの知らない」

そこには

「ライル・イシュザールに謀反の罪が発覚したため、本日、彼を逮捕しました」

『どういうことなの！？これ、あなたとなのはちゃんとはやてちゃん報告してるじゃない！…！』

「そんなこと言われても私、そんな書類……………っ！！まさか……………あの局員の持ってきた紙」

『あの紙？あの紙って何のことよ』

フェイトは局員がはやてからの新部隊設立についての書類を持ってきて、それにサインをしたことを話した。リンディはそれを聞くと、額に手を当てて大きくため息をついた

『フェイト……………あなた達、見事にだまされたわね』

「だまされた？」

『そうよ。はやてちゃんに聞いてみなさい。そんな書類送ってないって言うはずよ？』

リンディの通信を繋げたまま、今度ははやてに連絡をとった。そこにはいつもと変わらない様子のはやての姿が映し出されていた

『どないしたん？フェイトちゃんから連絡なんて珍しいなあ』

「はやて、新部隊設立の書類、私に送ったよね！？」

『え？フェイトちゃんがリンディさんから許可がおりたって書類に書いてあったじゃん』

はやてのところにはフェイトが出した記憶のない書類が届いていた
フェイトは今度はなののもとへ連絡をしました。しかし、連絡に
出たなのも

『え？これ、はやてちゃんからじゃないの？』

『いや、うちはなんも知らんで。フェイトちゃんどないしたん？真
っ青な顔して』

「……………母さんが……………これ……………」

先程リンディから送られてきた書類を見たなのとはやてはフェイ
ト同様顔が真っ青に染った

『……………フェイトちゃん……………ライル君は』

「……………うん、さっきから連絡とろうとしてるんだけど、全然でな
いんだ」

『そうね、おそらく、彼はもう管理局の牢屋の中、または下らない
生物実験の実験体になっているかのどちらかね』

リンディの言葉を聞く前にフェイト達は通信を切ってしまいました

「……………はあ、全く何を企んでいるのよ」

通信を切ったリンディ様のパソコンには不気味な笑みを浮かべる研究者の名前があった

第4章 別れの刻

時空監理局のとある大きな部屋の中にライルは気絶した状態で緑色の液体が入ったカプセルの中にいた。おそらく連行された際に眠らされたのだろうか、目を覚ます気配は一向にない

「くくく、まさかこんなにうまくいくとは思わなかったけど……
平和ボケした小娘達等にはこれを見破る等無理な話かしらね……」

手元の機械を動かす手を止めることなくカプセルの中のライルを見る。すると、カプセルの内側から機械のアームが現れ、不気味な光を輝かせる

『……………ん？』

不気味な光を感知したのか、ライルが目を覚ましたようだ。そして、自分の置かれている状況を段々と理解しようと思いを回転させる

「あら、イシユザール一等空佐、目覚めの気分はどう？」

『っ！！……………これはこれはクリステイア元少将。できれば私の置かれている状況を詳しく説明して欲しいのですが……………』

「あなたの置かれている状況ねえ。あなたは謀反の罪で処刑される

はずだったんだけどねえ。あなたみたいな優秀な魔道士を失うのは惜しくてね、研究材料としてもらったのよ……上層部のお偉いさんね」

彼女はクリスティア・ジェネラル『元』少将。最近、違法とされている人体実験がばれてしまい、管理局をクビにされた女性だ。実験素材を手に入れるためならどんな汚いことにも手を出すような人だ

『……なるほど、つまり私は高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやての三人に裏切られ、あなたの実験材料にされたということですか』

「まあ、はっきり言えばそうなるわね。どう？今まで信頼していた人たちに裏切られた気分は」

『相変わらず人の不幸を笑うのがお好きなようですね』

「ふふふ、最高ね。他人の不幸なんか私にとっては最高のスパイスね」

不気味な笑みを浮かべてライルをうつとりと見つめる。それが気に入らないのかライルは彼女と目を合わせようとしない

「ふふ、まあいいわ。今回は結構大きなモノだからね。普通の魔道士程度の魔力じゃあどうにも成果がなくてねえ」

どうやらライルの前に多くの局員が犠牲になっているようで、少し前から噂になっていて局員の失踪事件。おそらく、その局員の殆どが彼女の研究の犠牲になっているのだろう

「そんなに多くの方を犠牲にしても完成しなかったのですか？あなたらしくもないですね。それともその研究が厳しいものなのか……」

「正解は後者よ。今回は古代ベルカの時代に存在したロストロギア魔の剣でね、最近になって何本か見つかったね、本局に保管されていたのよ。今回はその魔の剣の適合者を作ってたのよ」

「……つまり、私は今回、その実験の材料というわけですか」

「察しがいいわねといってもこの状況じゃあ、分からないほうがおかしいわね。でもビックリしたわ。あの三人が新部隊の設立のためにあなたをすぐに差し出してくれたのは。おかげでスムーズに研究が進んでいるわ」

会話に嘘を交えて話すクリスティア。平然と話すその様子を眺めているライルは表情さえ崩さないものの、内心では何故なのは達が自分を裏切ったのが全く分からず、疑問の念に支配されていた

「それじゃあ早速はじめさせてもらおうわ。恨むならあなたを裏切った三人を恨むのね」

カプセルの内側から伸びる機械の腕がライルに迫っていく。覚悟を決めたのか目を閉じるライル。そして、彼は意識を失う寸前、心に深く思った

あの三人を死んでも許さないという思いを

「フェイトちゃんこつちで間違いないの？」

「うん、確か処分される人はみんなこの先の地下牢に閉じ込められているはずだから」

「とにかく急がな！！」

3人はフェイトを先頭にライルが閉じ込められているだろう場所に走っていく。しかし、運動神経が神クラス並みに悪いのがどうしても遅くなっている

「なのはちゃん速くせな!!」

「ま、待ってよはやてちゃん、フェイトちゃん。は、速いよ」

「そんなこと言ってる場合じゃないよ!!こんなことしている内にもライルが」

スピードをゆっくりにするどころかさらにスピードをあげるフェイト。はやてもそれに何とかついていくが、なのはは完全に遅れをとってしまった

しばらく走ると、ライルがいるであろう場所に着いたが、そこには気絶している4人の武装した局員がいた。慌てて確認を取ると、なんとか1人だけ意識を取り戻したようだ

「しっかりして!!一体何があつたんですか!?!」

「ハ、ハラ……オウン……執務官。こ、ここにイシュザール……一等……空佐を連れて……きたのですが、そこに……ク、クリステイア元少将が……イシュザール一等空佐を……ガハッ!!」

「なんだって!!クリステイア元少将が!?!」

「はあ、はあ、だ、誰なんフェイトちゃん。その人」

はやての質問に答えるように空間に浮かんだ画面を動かすと、1人の女性の写真とその女性についてのデータが現れた

「……………クリスティア・ジエネラル元少将。数年前に局内での人体実験がばれてしまい、管理局から追放された人だよ」

「でも、なんでそんな人が管理局にいるん？」

はやての言うとおり、管理局を追放された彼女が何故ここにいるのか。また、何故ライルをさらったのか。フェイトの頭に分からないことが沢山浮かび上がる

「……………多分、ライルを実験に使うつもりなんだ。でも、なんでライルが逮捕されたのを知って……………っ！！ま、まさか！！」

「多分フェイトちゃんもあたしと同じ考えにたどり着いたみたいやな」

お互いに意見が一致したことを察した2人は急いでクリスティアが少将時代に使っていた部屋を探そうと走り出す

「ところではやて、なのはは？」

「うん？そつえば……………なのはちゃんどこにいったんやろうか？」

その頃なのはは、2人に完全に置いていかれライルを探すどころか2人の行方を捜していた

「うーん、こつちだったかな？……あれ？この部屋から声が」

急に耳に届いてきた声に不思議に思ったなのははその部屋のドアに耳をあてると、機械が動く音とともに女性の不気味な笑い声が聞こえてくる。一瞬、不気味に思ったのはだが、息を殺して気づかないように再び耳をドアにあてる

『……ふふふ、思ったとおり……以上に研究が進んでいるわ』

中にいる女性はなのはが聞いていることなど知りもしないで嬉しそうな声を響かせる。しかし、その声も10人が聞いたら10人が気味が悪いと答えるような声だ

『それにしても、こんなにうまくいことは思わなかったわ。やつぱりエースオブエース達といえども、まだまだ現実を知らない小娘ね』

どうやら自分たちのことを言っているようなので、より詳しく聞くことと神経を聴覚に集中させる

『さてと、あとはこれを埋め込めば……ふふふ、古代ベルカの騎士、ライル・イシュザールの誕生だわ。ただ、メインの剣が見つからないのは残念だけど……この子なら大丈夫でしょう』

「っ！！ライル君！！！！！！」

大声を出して扉を開け、中に飛び込むのは。探していた人物は緑色の液体の浮かぶカプセルの中で眠っていた。そのカプセルを制御している機械らしきモノの傍には不気味な笑みを浮かべるクリステアがいた。その表情はやや不機嫌そうである

「あらあら、よくここが分かったわね。高町なのは一等空尉」

「……………何をしているんですか……………あなたは！！！！」

- set up -

自分の愛機^{デバイス}であるレイジングハート起動させ、その先をクリステアに向ける。彼女は面白そうと言わんばかりの表情で自分のデバイス、ウエスタリアを起動させる

「エースオブエースとはいえ、この子の前ではただの小娘ね」

「ライル君を……………返して！！」

「返して？ずいぶんおかしなことを言うのね。この子はあなた達が報告した犯罪者でしょ？もうすぐ死刑になる犯罪者をどうしようが

私の勝手じゃない？」

「私たちはそんなことしていない!!!!!!」

「口でならどうとでも言えるわ。それとも、あなた達がやってないという物証でもあるわけ？」

「そ、それは「はい、隙あり」「キヤアアアアア!!!!!!」

クリスティアのグラブ型のデバイスが綺麗になのはの鳩尾に襲いかかる。一瞬でなのはの懐に飛び込むスピード、彼女を簡単に吹き飛ばすほどのパワー。中距離から遠距離が主体のなのはにとっては相性が最悪と言っても過言ではない

吹き飛ばされたなのはは、部屋の壁に背中を強打してしまった。音からしてかなりのダメージを受けたようだ

「うふふ、これでも、元少将だからねえ」

指をボキボキ鳴らせながらなんとか立っているのはにせまる。そして、拳に紫色の魔力光がともった瞬間

- Photon ranswer faire -

クリスティアがいる場所に金色の魔力光が降り注いだ

「この魔力は」

「なのは！……！！」

声のした方にはバルディッシュを片手に持ったフェイトと制服姿のはやてがなのはのもとに駆けよってきていた

「フェイトちゃん！！はやてちゃん！！」

「いやあ、まさかなのはちゃんがここにいるとは思わなかったわあ」

「それよりもなのは、ライルは！？」

「あ、そうだ！！あそこに」あら、どうやら役者は揃ったみたいね
「？」

フェイトの不意を突いた攻撃も全く聞いていないようで、相変わらずの不気味な笑みを浮かべながら3人の姿を眺めていた

「……………クリスティア元少将。あなたを……………違法実験の容疑者として、逮捕します」

「あらあら、最近の執務官も物騒になったものね……………だけど、も

う手遅れみたいだけどね」

急に室内に響き渡る警報音、そして、カプセルに浮かんでいたライルの瞳がゆっくりと開き、その瞳に4人の姿が映し出される

『……………なのは……………フェイト……………はやて……………』

彼の瞳に温かな光は灯っておらず、逆に機械のような冷たい瞳が彼女たちを射抜いていた

「ラ、ライル君？」

『……………信じていたのに……………お前たちだけは信じていたのに』

彼の右手にともる緑色の魔力光。しかし、カプセル内の液体が緑色のせいでどれほど巨大なものかはわからない

『……………ストーム・スラッシュ……………ファイア!!!!!!!!!!』

彼の手から放たれた緑色の魔力刃はカプセルをいとも簡単に貫通し、なのは達に襲いかかる。防御しようとした彼女たちだが、第六感が防御してはいけないという危険信号を発していたので、左右に飛びのいた。すると先程までいた場所には綺麗な切り跡が残っていた

「ふふふ、素晴らしいわ。ただでさえ大きな魔力をもった子が……
……こんなに強くなるなんて。さすが古代ベルカの遺産、ロストロ
ギア魔の剣のコア」

「魔の剣やて!!」

魔の剣はロストロギアの中でも高ランクのもので、悪用されないよ
うに厳重な警備システムの下で管理していたはずなのだ

「あんだ、なんでそれを持ってるんや!!」

「知りたい？教えてあげよっか。ねえ

ブラッド・ケルベロス」

・ Yes my mother) はい、お母様(

ウエストリアの反対の手に握られていた漆黒の宝石のついたアクセサリーが不気味な光を放つ

「それは!!」

はやての瞳が大きく見開かれる。ブラッド・ケルベロスは魔の剣の中でも最恐レベルのものなのだ。それが彼女に従っている。はやての頭に最悪の状況が浮かんだ

「はい、そこのお嬢ちゃんの考えてる通りよ この子は私の2つ目の愛機デバイス、闇の力を持つ魔の剣ブラッド・ケルベロスよ………起きなさい」

- All right my mother start up)
分かりましたお母様。起動します) -

漆黒の光に包まれるクリスティア。黒い宝石から輝く漆黒の魔力光がその大きさと凶悪さを示している

そして、光が消えると、そこには漆黒の甲冑に中央に黒い宝石が埋め込まれたバリアジャケットを纏い、両手には漆黒の輝きを放つ銃剣が握られていた

「あれが………ブラッド・ケルベロス………」

『ふふふ、この子に見惚れるのはいいけど……あっちの子を忘れてるんじゃない?』

「なにを『ストーム・スラッシュ』っ!!」

再び横によけるはやて。ライルの相手をしながらクリスティアを逮捕しないといけない。つまり、2つのロストロギアを同時に相手しなければならぬのだ。これほど難しいミッションがあるだろうか

「なのはちゃん、フェイトちゃん!!取りあえず応援を呼ぶから、その間お願いできるか!？」

「分かった!!私はライル君を!!」

「私は元少将を!!」

ライルとクリスティアそれぞれの前に立つのはとフェイト。それを見たクリスティアは不気味な笑みを、ライルは再び魔力を手に込める

『……………そこまでだ、クリスティア君』

不意に聞えてきた男性の声、それはクリスティアの持つ通信機からのものであった

『どうしたんですか？ドクター』

『クリスティア君、我々の今の目的は達成したんだ。無駄な労力の消費はやめたまえ』

『……………はい。じゃあ、これから戻ります』

このような短い会話を終えたのち、クリスティアは足元に漆黒の魔法陣を展開させる。そして、ライルも一緒に連れて行くこととしたのだが、彼は既になのはを気絶させ、消え去った後だった

『あらあら、お仕事の早いこと……………それでは管理局のお嬢ちゃん。次会うときは本気で殺しあいましょうね』

「待て!!」

はやてが手を伸ばすが、それよりも先に彼女は魔法陣の中に姿を消してしまった。見届けるしかできなかったはやてはひとまず気絶しているのはを医務室に連れていくことにした

雨は3人の悲しみを表すかのようにしとしとと降り続いていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2881m/>

魔法少女リリカルなのは剣(ブレイド)

2011年11月17日02時12分発行